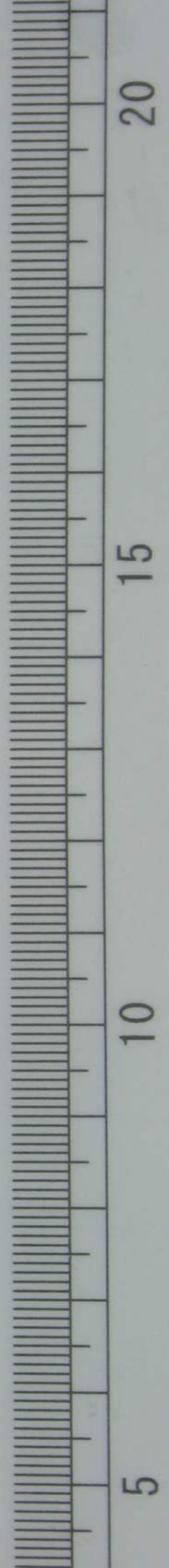


集歌

上の草

著園薰子金





99

版藏社潮新

集 歌

上の草

著 園 薫 子 金



版 藏 社 潮 新

30

35

40

45

50

55

60



上の草

上

社

集 歌

上の草

園 薫

社 潮 新

版 藏





集歌

上の草

園薫子金



京東

版藏社潮新



集 歌

上 の 草

園 薰 子 金



京 東

版 藏 社 潮 新



草
の
上

薫
園

硝子扉をぎいとあくれば藍いろの秋空があ
り夜明けの高臺

東京の眼ざめぬ街のまんなかに煙あげある
ほそき煙突

眼の下のあかつきの街を吹きわたる風の色
秋なり遠く擴ごれる

濠端の電車が風の如く行く九月の朝の涼し
きへだゝり

秋の朝コ、アを騒るカーテンのうごける窓
の下の涼しき

帯の如き秋の流れが見たくなれり徹夜のあ
とのしぶき眸のまへ

亞鉛屋根ころがる青き無花果の三つ四つの
音秋の夜明け方

秋のあはれ無花果にまつはるさまを見よポ
ツリポツリ落つ青き果みが落つ

一步一步秋風の前にちかづける如し玄づま
りかへる水うみ邊へん

アカシヤの葉にわづかなる黄が見ゆれ秋す
でに来る街のほとりに

棗の實、兒がエプロンのかいしよりこぼるゝ
秋の園のほそみち徑みち

初冬の園の入口のザムボアに手いれする園
丁が青服のよごれ

園丁に肩たゝかれて振りかへる温室の西洋
あさがほの前

枯れ蔓の赤き實などにたはぶれて温室のそ
とに驢馬のあそべり

冬の園こゑなく飛べる鳥を見てこゝろむな
しくなりもするかな

珈琲カフエーのあたゝかさ朝のすき腹に沁みわたり
園の冬ざれもよし

枯すゝきこもれる中に動きある小鳥が啜く
やうに啼くなり

睡蓮の枯れしまゝなる水にうかぶ魚の眼に
も冬が見ゆるなり

白き靴兒が行く先きの足跡の見ゆるがごと
し春の陽ひが照る

白き靴はつ歩む兒がまろき脛はきあらはに見せ
てよく動くなり

春の草はやも生ひいでよ、すべすべと白き小
靴のふみよかるらむ

春草のごとき足して土踏むが兒の大いなる
喜びなるらし

沫雪が銀座のまちにとくる朝おもちや屋の
店に首ふる人形

朝鮮より驢馬をおくらむといひし人に返り
ごとせず春となりけり

驢馬のうへのわが兒が見たし青ぞらのもと
につゞける細かき春草

抱き乗する時、その足つきのいかなど驢馬
を飼はまく思ひけるかな

智慧づける兒が顔に青き果みのうつる原の樹
かげに行きて守まもりする

智慧熱とや病のなかのいとしき名、兒があか

るめる頬を見まもる

このごろは後追あとおふことも知りそめぬさみし
き父が背を見おぼえて

夏まつり神輿みこしのあとの兒の群れの小ちさき素
足の吾兒わがこにかも似る

尻からげしてやれば兒はよちよちと一いっ間けんばかりありむ芝原

朝露の原よりかへる乳母車つゞく輪がたに
青き香のする

いつか來む、薄うす暮ぼの空のうす明りおもひしづ
かに京に別れいふ

山々に雲低く垂れ霖な雨あめの節となりけりはや
かへりなむ

居なれたる旅室りよしつの前の青かへで今日のわか
れにそよぎやまざる

よくそよぐ青き楓の葉のしげり夕べとなれ
ば寢に來る鳥

加茂川の草青き洲に風わたりさゞ波ぞ立つ
ほそき流れの

夏やなぎ川原にすゑし三脚さんきくのあたりに遊ぶ
朝の風かな

てりかへす夏の柳の陽ひの青さ、わが白浴衣よ
らば染むべし

三本木さんほんぎ、夏あさき夜のかなしみを宿の手すり
にいざなへる水

一つ二つ別れの酒のかさなりぬ加茂川を吹
き冷ゆる夜風に

酒の後、兒がこと胸を冷しけれわれ旅に来て
幾日経ぬらむ

旅の夜に線香花火の光り見て大きくなれる
兒をおもふかな

秋の空兒を見る親の顔のごとおもひくまな
く晴れわたりけり

新しき帽のひさしに秋の陽ひをまぶしくよく
る兒がほそき眸まみ

ふところゑをたてゝ笑へる兒が顔の明るさ、秋
のまひるの街路

寫眞師の庭に葵の花さけり兒がはつ姿とら
する秋の日

鉦鳴らし島より來る早ふねに涙ながれぬ寒
きゆふべは

帆をあげて重なり来る船のかずに夕べの海
は狭く見ゆるなり

船大工煙草ふかしてかたはらの妻子にももの
をいふ晝やすみ

しづけくも白砂に照れる秋の陽を見つめて
今の餘念なきかな

晴れ空をひたせる秋の海の水手にすくひみ
ればうかぶ哀しみ

燈臺に火が點けばあそびゐしかもめ翼を垂
れていづくにか行く

秋あかるき漁村の路に逢ふ海女の一人の赤
きふたのが目に立つ

秋の濱驢馬の上なる少年のうしろ姿のおだ
やかに行く

寒き朝の手すりの下の潮入りの川に鷗の浮
き沈みする

朝晴れの海をよろこび織る如く舞ひむらが
れり鷗、鴉

秋の晝の小島に石を切る音のしづけき海を
ひゞかせにける

久世山の月夜をひとり踏む土のしめりに涙
ぐましくなれり

月の夜の遠き市街の灯のかげの海のごとく
もうち霧^きらひ見ゆ

花火見る大川端の夏の夜の人のどよみのき
こゆる二階

吹いて来ぬ、汝^なが病體にさはらざる秋風なら
ばこゝろよく受けむ

おもひあれば朝の鯛なきしきる涼しき音に
も涙落つなり

蟲賣が煉瓦だゝみをふみゆけり更けては夜
の銀座もさみし

秋ちかき銀座のまちの入口のアカシヤの樹
のうへの夕月

月光は青ざめし色に咽ぶなり草間をわけて
水ながれ行く

ひとひらのゆく雲がいまほつかりとうつる
崖下の青すめる水

ぼつと明るみへ出でよと友は女々しきわが
執著を笑ひゐるなり

漂泊のわが生の旅にすがりくる小さき手を
ば放ちかねつも

熱きなみだ兒が頬にかゝり眼ざめたるひと
み眞珠のごとく光れる

このわづらひ胸にたゞめば憂鬱の谷のごと
くも底ふかみ行く

見るほどに小春の陽かげわが胸にしたしみ
寄する黄菊のあつまり

こまかなる柘榴の葉こそあはれなれひと夜
霜ふりみな黄ばみけり

青空のもとに重なる雑木ざぶの黄ばむ林の高き
に眸めをやる

兒が伴ともに犬飼ひやらむ黄葉くわうえふのつゞく徑こみちの午
後のわが家

萩の咲くしげみに入りて空わたる秋風を見
るおもひはるかに (以下、萩寺に先師の萩の碑の建ちし日)

萩が花わが涙にじみ咲くごとく見つむれば
眼の曇りくるかな

萩の碑に倚り居れば秋の夕影の濃くなりて
きぬいつか眼をとづ

秋の晴れ師が温顔の眼にうかぶあめつちの
色萩のあつまり

風遠く來りて過去をおもはする萩のそよぎ
に陽ひの光りけり

妹よなどさはこゝろ弱くなりし、はかなきこ
とも涙してけり（以下、病める妹を看とりて）

涙のみて八つ手の花に眸めをそらしそのおと
ろへを見まじとぞする

それとなく哀しきこともいひにしがいつか
眠りに落ちゆけるかな

病院の庭のダリヤの白き花そのいろとなく
淋しき夕べ

時をうつ枕時計と病院のガラス戸の外のま
たゝく星と

昏睡はきたれり秋の草木のこゑなく闇にし
づみ入るごと

病院に送るくるまのおだやかな護謨輪のお
とも身に沁みにけり

病院の長き廊下のうすくらがりふときく若
きをんなの呻うめき

おとろへて羽根の衾ふすまもたへがたき妹の顔に
かくるうすぎぬ

二ふた歳つになるわが兒が叔母の病牀に這ひよれ
ば弱き眸めに見やるかな

病室の外のざくろのはせし實のうへに雲浮
く空のあるいろ

※

冬の樹のあひだより入る薄き陽ひのわが憩ふ
前に見え、つと目をあく

羽ばたきてひそみし鳥もいでゆけり林のな
かの事なきさびしさ

わがこゝろいしくも知れる汝れの眸まのうる
めるごとし斜めの冬の陽ひ

久ひさにあへばなみだぞ下る、肉親の愛のやうに
もうらさびしかり

京をいで、見かへるこゝろ、霽れぞらに水蒸
氣たつごとくあかるし

底冷えの京の夜にひとりあるごとし粉雪の
かゝる音の戸にする

京に来て仰げばちかきふるさとの冬空青く
晴れわたるかな

雪の前の松のはやしの路ゆけるうしろより
鐘の鳴るにおどろく

山脈の間に淡くあゐいろの水見ゆ晴れし丘
にのぼれば

京の夜にわかれを惜むこともせずさびしや
かへりの五十三驛

停車場をいで、並木の夜をゆくわが肩にち
るものあり落葉か

落葉する前の樹木のしづかなるさびしきこゝろわが夜に來ぬ

いとせめてかなしきことをいひて來ぬ二月の外の光りに讀める

汝^ながふみにあかるきかげを見むとして眼に浮べたる淋しきひとみ

家をはなれ途よりとある走りがき鉛筆のあとにわが涙落つ

京なまり口語のふみにまじりきく柔らかき春の朝のこゝろに

目をとちて運命の手にゆだねべくあまりに汝れのいとしかりけり

新しき旅鞆など買ひてみぬ京へゆく日の近
づきにけり

晴々せるこゝろになりて汝^なをおもはむわが
眼の上の青みゆく空

相見ずてすぎし七日のことごとくなどさは
胸をいたましめしや

見つむれば眸^めに痛きまで雪白しわれらの愛
のいろにかも似む

冬晴れにすまひもとめて岡崎の赤つち路に
うぐひすをきく

図書館の白堊が白く眼に沁みる疏水のへり
の冬のうすくれ

蒼白き月夜の寺の長土塀かげふみゆかば死
に誘はれむ

汝^なを思へば明るくなれる胸のごと、ばつと晴
れたる冬の青空

ふるさとの松のすがたの見まほしくこの冬
晴れに丹後に下る

目を瞑^とぢてものはぬ日のわがこゝろ偶像
よりも冷たかるべし

このごろは烟草も吸ひぬ酒のみぬ淋しき
こゝろみたすばかりに

汝れを先づ銀座通りに伴はむアカシヤの芽
も青み來ぬべし

しひてわが愁ひ抑ふるごとくなる春の陽^ひを
見て堪へがたくなりぬ

鬱々と晴れやらぬ胸をいだき來ぬ京のひが
しの春の林に

きさらぎの比叡のふもとに宿借りてももの書
ける手に沁みる夜の冷え

こゝもまたものうくなりて移り來し平等院
のほとりの春寒

宇治橋に春の夕陽を見つゝおもひうかべぬ
京を去りしことども

かりそめの病人となりて日を経れる京の旅
寢の春寒きころ

わが寝ねしとばかりものゝ本を讀むしをら
しき横顔をつと見る

横顔のうすら冷たさ、と外面もには春の夜寒の粉
雪がふれる

わかれ来て百二十里の西ぞらの春の夕陽を
さびしく見入れる

青空を流るゝ雲のあかくるも西へ行くなり
わがおもふまゝに

わがかくる眼鏡の金具かなぐ春さむき朝のひかり
につと閃めけり

ストーヴを焚きそふる手の血色のうごきて
ぞ見ゆ二月の燈

下加茂の二月の森はわが親のすがたの如く
なつかしきかな

耳すませば朱あかの鳥居に早春の陽ひのうごくさ
へきこゆるばかり

こゝにして汝なを思ふばかりこゝろ澄みしづ
けきはなし二月の森しん林りん

おごそかの神につかふるこゝろもて春の落
葉をふみゆけるかな

わりなくも森の一路の枯草に春の霜見てお
もひいためる

葵橋のかなたに長き上加茂の路のゆくての
春の陽のかげ

おもひいづる去年こぞの五月の路のへの河原よ
もぎの芽に涙しぬ

ふいと比叡の二月の光る雪を見て寒しと倚
りし汝なが姿かな

かくなりし奇くしき縁えんのかたりぐさ、上加茂の
路ははや盡きにけり

おとなしくわが悲しみをくみわけてうなづ
く汝れを涙して見る

柳の芽ちらと光りて加茂川のほとりの春は
青みそめけり

宇治橋に春の夕陽を惜みあひぬ明日はあづ
まにかへるといふ日

静けさに泣きたくなれりあゝ宇治よ、この一
廓の春の夕ぐれ

橋姫のやしろにくれば春の日は今ゆふべな
り川千鳥啼く

鐘の音は平等院か橋寺か世を宇治山に陽ひの
かげるころ

「花やしき」いづれば春の川風はわが煙草ふき
わが酔ひを吹く

京の夜はやゝ靄だちてふけゆけりおもひの
こしてあづまにかへる

白金しろかねのいもと※の家の夾竹桃二月の朝の戸を
青うする

その部屋の牕のゆふべの薄明り末の妹にオ
ルガンを弾く

陽の光りにじむが如く見えそめし雑木ばや
しの春あさき色

縁に立ちて春の光りのうごくさまを見てゐ
る妹の黙せる顔かな

めづらしくそんな氣になり寫眞師を呼びて
撮とらす妹のこゝろよき日

*

春の雨異國たばこの黄なる粉のしみ入れる
指の爪を見てゐる

春の夜の煙草のかをりうす甘くひとりを部
屋に眠らするかな

ふとさめてひとりの春の夜のこゝろ口にあ
てがふ異國の煙草

吸ひさしの煙草のけむり春の夜の電氣の笠
にうすくかゝれる

病ゆる醫者に煙草をとめられてしよざわい
もなく春の雨見る

沈丁花、花さくころの宵やみにさしぐみて來
るをんなをおもふ

夜くらきわが家の庭の沈丁花冷えし手にも
つ花のふるへる

さくら花林をなせる丘つゞきなゝめなる陽
にちかくあかるし

新緑のポプラの並ぶ水邊のわかれ路となる
春のあけぼの

菜の花にあかるき晝の郊外の路せばみきて
見ゆるわが家

わが家の小さくかぎれる菜ばたけの黄なる
夕陽をねむたくも見る

日光にあかるき木の芽草の芽のあをやかな
るに沫雪ながる

京へゆく話のいづる縁がはに夾竹桃の夏落
葉する

六月の曇天のもと、くれなるのにじめる色に
夾竹桃さく

兒を抱きてよれば涼しき水無月の夾竹桃の
花さく葉かげ

水打てる如きしづかの朝明けに夾竹桃の落
葉掃きよす

かきみだるゝわが胸にしもうつりたる夾竹
桃のしをらしきかな

赤き嘴^{はし}夾竹桃をついばめる文鳥のふりのな
まめかしけれ

月白く夾竹桃の露じめる花にさす時なみだ
落ちぬる

水づける夾竹桃の青き葉を雨すぎし後に見
しさわやかさ

夏の雨あをくそゝげる竹むらの縁のはしる
のひとりがうれし

六月の雨すぎぬれば夜の鳥のほうほうと啼
く林にちかき家

門を入れば雌竹のかせの汗ばめる肌衣はだぎをぞ
吹く青き水無月

しづかなる*奈良公園の青芝に雨二三滴来た
る夕ぐれ

手をおけば動物の背のざらつけり暮春の空
の雨ふらむとす

人馴れてしたがひ来る鹿の群れ顔一つ一つ
うれしくもなし

大木の木の根に髯の長き鹿ねむれり、揺れど
起きもえざるべし

藤の花杉のわか葉にかゝり見ゆ仰げば高き
暮春のうす陽

ゆめの如く春日少女の舞の手のうごけり藤
の花さく曇り日

一つ二つ嫩草山をあゆみゐる鹿の背青く陽
の反射する

鐘が鳴る奈良の旅籠の春の夜のものゆかし
さに寝ねすあるかな

春過ぎて築土つちのくづれつゝ、じ咲く汗ばめる
日の晴れぐもりする

初夏のたべものゝいろに映りけり竹の軒ば
の柏のわか葉（二首、京の瓢亭にて）

水の音に二人がおもひしづまりぬこの夕ぐ
れの泣かまほしけれ

※

月見草さびしき夢の如くなる廢園のつゆし
ろきおぼろ夜

君すますなりてとざせし洋館の屋根の露し
ろく月に光れり

芝草にねころべば露は身の毒ときゝなれし
ことのふと胸にしむ

路たまたまさまよひ入りし廢園のしげき夜
つゆに月のましろき

君にわかれ月の光りにうちそむき暗き林の
間に入れる

水のごと夜のすゞしきにながれくる森のあ
なたの原の蟲の音

原中の草の夜露に立ちぬれてきく鈴蟲の兒
がこゑに似る

鈴蟲がとぎせる窓のうちに啼く、築地つきちの河岸
の白うふくれば

飼はれたるはじめての夜も次の夜ももだし
てありぬ籠の鈴蟲

よべ啼きし鈴蟲がそのうす紅の夾竹桃の花
を吸ひをり

吾妹子が窓の蔓花つゆしろく朝のこゝろの
澄むといふなり

秋の夜の露臺にいでゝかたること水の如く
も涼しかりけり

つゆしろき露臺にしとゞぬれし衣きぬほしもあ
へず朝の別れとなりけり

よこたはる銀河のながれ夜はふけぬいざ寢
む汝れの手の冷えしこと

※

奈良に来て遠き心のふるさとのわが世にあ
るに驚かれぬる（以下、奈良の初めての印象をよめる）

猿澤の池のやなぎの夜の葉の遠きにこゝろ
みちびきてちる

楊柳のかげのしとれる猿澤の池のゆふべの
水をながむる

春すぎて南圓堂の藤の花むなしきあとに來
りさびしむ

寺々のひるの鐘鳴る、ぼうとして舊都のゆめ
のなかにたゝずむ

寺々をめぐれば父のその父の又の父にも逢
ふこゝちする

いまもなほそれの女^{ひめ}王^{みこ}うるはしくこゝの都
にませりとおもふ

春日野の青ぐさふめば業平の足跡をゆくこ
こちするかな

見あぐれば嫩草山の青芝のなめらかなるに
こゝろ融けゆく

ねむたげの小鹿の顔のぼんやりと杉の木暗
にあつまりて見ゆ

つと低き馬^あ酔^し木^びのかげにかくれたり青葉の
ひまに耳のうごける

動くともなく嫩草山の青をふむ三つ四つ二
つ鹿ののどけさ

*
京の宿に見しをとめこの年一つそひて姿の
よろしかるらむ

ものいひのとくるが如き柔らかかさその一こ
とを口まねて見る

つゝましく宿の廊下をあゆみくるスリツパ
の音をおもひいづるかな

消息のはしに呬やく如く、ゆめ京の初秋の日
をわすれ給ふな

うるはしき京の女の風俗を君にあつめて見
るこゝちする

何なりし一こといひてさと顔をあかめし時
のあどけなかりき

蟲の音を耳かたむけてきゝし顔灯かげに白
く見るこゝちする

半日をわがそばにゐて歌よみしその前髪
のほひをおもふ

高臺寺の萩にうちつれゆかむなどいひしを
はやく別れ來しかな

をとめごよ初めて逢ひしわかさにてまたこ
の秋もわれにまみえよ

加茂川の柳青みて汝が眸まみのうるほふころと
はやもなるべし

葵まつりをはりしあとの初夏の小雨の朝の
京はさびしき

平安の神宮みやのみその燕子花おとなしき汝
れの頬ほににほへる

水一すぢ森の東をながれたり、いそいとゆ
き見かへればさびし

病むといふ消息をえてなみだしぬ、かよわき
もののいかにありやと

初夏の京の幾日のおもひでのさびし青葉の
色ふかむごと

祇園會の山鉾を見に來ませともいはすやつ
れのくるしかるらむ

さびしき時かの上加茂のみちのこと思へば
汝れの横顔の見ゆ

夜をこめて汝れが手縫ひの絹ぶくろ手にす
れば何か涙おぼゆる

ちかよりてしみじみものを言ひもえずこの
夜のわかれ物足らぬかな

停車場のふけし灯かげに青白き汝れのおも
わのひとつ残らむ

何も知らぬ夜汽車の中の人々の眼にも映ら
むわれの淋しさ

かへりきてをぐらき室に置かれたる旅鞆な
ど淋しかりけり

こゝろよき疲れなりしよ、上加茂をゆきかへ
りせし汗のしめりも

うちゑみて日傘の人のちかよれり汝^なが乳母
なりし上加茂の路

かへるさは月見草など咲くならむ長き河原
のゆふべとならむ

汝れよ、かの河原よもぎの香が指に染みしひ
と日を思ひいづるや

京に入る夜月おぼろなり寺々の鐘のなごり
の遠くたゞよへる

風かをる御池通りを西すれば君が門見ゆ堀
川の見ゆ

初夏の御池の南きよらなる冷たき水の如き
君すむ

一椀のうす茶の上に風わたりことばすくな
にむかふ半日

描^かきかけの繪は川あそび、ふなばたの涼しき
人は君にやはあらぬ

窓あくれば比叡のみどりの晴れやかにあか
るく京の見えわたるかな

牛が挽く車の音のねむたげに見上ぐれば山
は青く霞めり

病院の庭の新樹に看護婦の立ちばなしする
軽きひるすぎ

岡崎にすみかもとめて東あづまより下りし如きわ
がすがたかな

残し來し京の五月のなつかしき姿となりて
胸ににほへる

西陣の梭の音する、ふと耳に君があたりの梭
の音する

加茂川の川原の草に風そよぎ秋のけはひの
立ちやしぬらむ

今宵そゞろ詠草などやかきをらむ灯かげに
白きえりあしの見ゆ

詠草をかきゐる汝れが手の見ゆれとゞこほ
りなき文字さへ見ゆれ

蓮月尼のするどきぎえも時に見ゆうらわか
き子の歌のいみじさ

女弟子の數ある中に一人の汝なが詠みぶりの
こゝろにくかり

わがをとめ純すいなるこゝろ嫁なぎなばきゆらむ
歌の光りも消ゆらむ

夜のねざめに鈴蟲なけりその低きすみとは
る音に汝れのおもほゆ

朝の萩にそよ風わたりしなしなと顫へやま
ぬ葉に睫毛うるみぬ

京の山秋の氣をはくこのごろの曉起きのす
ずしかるらむ

暮れゆける比叡を惜しみて窓際によりぬわ
かれの夜となりにけり

比叡の山の御堂の裏の新緑のうるはしさな
どかたりあひしかな

東京がさびしくなりて旅に出づ初冬の日の
暮れもはてぬに

京にゆかむふと口ばしりたることがまこと
となれる冬の青空

ほのぼのと東近江の山あひの黄葉もみぢの村のあ
けゆけるころ

白壁の庫のうしろの山腹にちらちら光る雑ざふ
木きのもみぢ

初冬の西の山べの雑木ざふの落葉のしげき夕べ
なるかな

京に入れば北山時雨晴れ空の青きをよそに
ふりもかゝれり

京の宿に繪のかたるぐを繰る汝れの手のし
なやかに動くさま見る

手をわかつ御池通の月明げつめいの春の夜の如くお
もひまつはる

黒谷の夜のみ寺のさむかりし夢路をおもふ
落葉を見つゝ

かわきたる落葉の匂ひ北山の冬の陽かげを
おもはするかな

うら淋しき愛をいだきて茫然と青空を見る
日のみつゞける

下加茂の冬枯れのなかを犬ゆけり狐の如き
尾をたらしつゝ

山麓の黄なるポプラに夕もやのうすれゆく
ころほといきをつく

ポプラの葉ひるがへり來ぬまつはれる淋し
き愛をおもへる前に

夕げむりたちのぼる山の半腹にちつと立ち
たるさびしきポプラ

曇り日の水ばたに立つポプラの木音なく黄
なる葉の落つるかな

東京の空灰白くくもりけり何かかへりのも
のうくなりぬ

初冬の北山みちのうちしぐれ泣き顔ぞする
相ゆく汝れは

大原女は三千院のみちすぢの黄なるぬるで
の木のかげに消ゆ

紙屋川水かれがれに冬となる橋の上よりち
りくる黄葉もみぢ

うらさびしき時目の前にうかびくる永觀堂
のもみぢの色かな

京をいで、女院の墓に泣きに来しわが淋し
さを思ひたまはじ（四首、寂光院をたづねて）

ひとしづく佐の局のちひさなるまゐるしの石
をぬらせる涙

藁草履苔路のつゆをふみきたる大原おほはらの里の
かなしきみ寺

秋のをはり御幸ごかうの路のあとたどり大原の奥
にさまよひて來ぬ

八瀬の橋紅葉をいで、ゆるやかに音たて、
くる牛ぐるまかな

水一すぢさむく流れぬ、見あぐれば山の紅葉
の陽かげになれり

あたゝかきコ、アを啜りかたりつぐ夜話の
半ばに鷗のなける（以下、竹内栖鳳氏を訪ひて）

鷗なく、夜ふけの京のしづかなるあたりひゞ
かせ鳥屋とヤに啼くこゑ

霜月の長夜を寒み鷗なく一羽がなければまた
一羽啼く

冬の夜はふけぬましろく霜おかむ鷗のなけ
る鳥屋のまはりに

飼はれたる二羽のかもめのしたしませず背を
そむける日かげと日向

*

晩春のかまくら山をさまよへるわれのすが
たの僧と見ゆらむ

山寺の石橋による肉體のひいやりとする春
のくれがた

石橋のほとりのやなぎ春ふかき夕さびしら
に長く垂れたり

夕ぐれの波うちぎはに猫のゐぬ小さきかた
ち何かあはれなり

砂山のかもめの群れの眸めにしみる暮春の海
のひるのさびしさ

晩春の海邊の砂に蒲公英のほうけたるかげ
落すひるすぎ

草原のかげる夕日に晩春のさびしさを趁ひ
海をながむる

庭向きのわが部屋部屋を暗くする枇杷のし
げりの淋しき初夏

枇杷に萌ゆる若葉に春のくれの陽ひのしみ入
りもせずあはれ消えゆく

初夏のにほひの中にわが臭ひかぎつけてく
る白き小犬よ

楓などしづかに淡きかげつくる一路に通ず
原のあなたは

青き果^みに吸はれていろの褪めゆける葡萄葉
が陽をかへすさびしさ

青葡萄窓にさがれりおとろへしわが神経の
刺さるゝごとし

落ちちれる青き葡萄の果^みにじやれてあそぶ
小猫の振舞もさびし

青葉くらくおそ夏に入る鬱々と新しきこと
を考へてみる

わが頭水の如くも澄みゆけりしひて眸^めをと
ちものをおもはず

いきぐるしく寝^ねる夜のゆめに來し人のよそ
よそしさも時にこそよれ

そのあくる日見たるかの眸めがかの口がよべ
と同じき表情をする

冷やかに二言三言いひしことわれながらあ
まり興さめにけり

思ひのこすことなきさまに歸りゆく肩のあ
たりの輕げなるかな

相見ずて二月あまり過ぎにけりうるほひも
なき青葉のいろかな

萩などにきなける蟲の低き音も夜のこゝろ
にとほりねむれず

さみしさはそのことゝなく身に沁みぬ青葉
のいろの黒みゆくころ

音をなける身がまへなして死にゆきしわが
まゝなりし我がこのすゝむし
啼きやみし時にあはれの骸かみなりし小さきも
のをちつと見つむる

*

晴々せしこゝちになりてわが兒をば抱きて
見しかな秋空のもと

青空を見すれば足をつまだてゝよろこぶこ
とも解しあるかな

兒を抱きて宮詣りする十月の陽のあかるさ
よ人の出て見る

抱ける兒を十月の陽にてらさせて眩しがる
眸めを見つむれば啼く

ひしと抱けば兒がぬくもりの通ひきぬ父と
いふわが淋しき意識

わが抱けるかひなに小さき顔のせてすやす
やと兒は眠りにぞゆく

みめよしと人のいへるにしげしげとわが兒
の顔を見まもりしかな

君が兒とわが兒と春の日を浴びて樹下にあ
そぶをおもひても見ぬ

さだまらぬ眸めにながめゐる柘榴の果み火を吐
く色もかゝはりなからむ

一つもぎて食へば、も一つ欲しくなりぬ嬰ち兒こ
が寢顔の前の無花果

乳首ちゆびのごと黒く熟うれたる無花果ののこる一
つがうらがなしかり

なにものかちつと見てゐるおごそかの兒が
まなざしに澄みくる心

何故に生れて來しや、つぶらなる眼してわれ
見る兒に涙落つ

物ごゝろつく時汝れは別々のこゝろに棲め
る父母を悲しまむ

啼きやまぬ兒がにくゝなりいらいと抱き
て見れば哀れになれり

火のつくが如く啼く兒のこゑに沁み入り
て長き夜の寝ねがたし

さびしさに生きがたき身こそ哀しけれ秋空
を見てしみじみ思ふ

ちつと座して雲見る如きしづかなる心には
なれ秋かせをきく

ふと長き流れの前に出でしとき涙とどめな
く落ち来るかな

秋雲の黄ばみがうつるいさゝかの草間の水
を覗き見るかな

野菊などむらがり咲ける足もとのやうやく
暗くなりにつけらしな

水ばたを秋の日に行く一列のアカシヤの樹
のまばらの葉かげ

船つき場アカシヤの葉のちりしける午後の
しづけさ、水をながむる

秋の空たゞ高うわが生活にかゝはりもなく
すめるさびしさ

おもむろに雲は動けり煙あげて來る汽船の
水遠く見ゆ

山住みのはじめての秋の風寒しとある一こ
とも身にひゞきける

かきさせるいくその文字のありありと見ゆ
るが如くこゝろふるへぬ

たゞひとり山のはざまの夜のそらのほそき
月見てさびしからまし

かりそめの病いだきてありといふその消息
の手のふるへかな

山にてもなほうき時はとうたひさし俄にか
ほをくもらせしかな

海荒るゝ夜の巖かげのしづかなれあやしく
も胸にかなふ藻の香り

聲のかぎり歌へど夜の荒潮のひゞきのなか
にあはれなるかな

夏潮をちつときゝゐる砂山の旅客の前に夜
が来りけり

ふけゆきて夜潮の音のしづまれり三崎通ひ
の汽船の笛鳴る

潮の音も夏のしらべとなり
にけり立ちどまりきく
旅館の廊下

すゞしくも君がひとみのうごきけり
電車のそとの初夏の海

階前をあをかへでこそすゞし
けれ食べさしの菓子
の器に映れる（二首、京の宿にて）

新茶の香あづまの菓子とわが舌に
しみあへる時風かろく來ぬ

樹のしげみ青ぐらき水にうごか
ざるうろくづの背の黒きあつ
まり（三首、京の瓢亭にて）

魚の背のつと光りけり庭さ
きの柏の青葉風がわくれば

蚊のうなり微酔の耳にかろく來ぬそのしづ
けさも懐かしきかな

*

山おろし六月の朝の乗合の馬車の幕さむく
吹きやまぬかな

千曲川わたせる假の橋板に喇叭のひびきの
こし馬車ゆく

橋のあなた須阪の町の烟突の山の青葉にけ
むり吐く見ゆ

空を見る眸に六月の雪白し遠き世界のごと
きアルプス

山間の青く黄なる日光の身にこゝろよきあ
つさなるかな

山寺のしだれざくらの老木の門をおほへる
青きひるすぎ

黙し居る老僧の眼の鈍くてる山の書院に青
葉そよげり

溪水の白きひゞきの山里に落ちてながれて
寺の前ゆく

千曲川河原に遠きアルプスの山脈にてる夏
の雪かな

夕ぞらに淺間が吐ける濃きけむりをちかた
にして馬車に揺られゆく

夕されば山より町におりきたる鑛夫等が眼
に燃ゆる紅き燈ひ

唄ひ女の三味線鳴れば夜のこゝろみだされ
てゆく山の鑛夫等

*

さびしさびし、わがゆくところ寂しけれ木枯
のなかの停車場に立つ

枯草にさびしきかげと伴ひて遠くも來つれ
陽は山に入る

風のあとの雑木林のわきをゆく荷馬車にう
すく陽のあたりける

をりをり來て書き物をせし郊外の家の灯ともしを
春の夜に見る

大崎の田圃の上の冬空をうすぐらくする工
場のけむり

わかうして晴れやかならぬわが性を口癖に
祖父は氣にされしかな

われとわがあやしむばかりうち沈み深きう
れひを趁ふごときかな

目をあぐれば廣き家^やうちをくらくする枇杷
の大木に花の咲きみつ

あわたゞしく珈琲を呼び早春のかげる陽か
げをさびしくも見る

われ訪ふと路上を來る人おもふ倦みつかれ
たる午後つくろの卓つくろに

その人は角の煉瓦の塀にそひ薄き陽かげを
ふみて來つらむ

わが歩む冬の木原にみちし日のかぎるひゆ
ける一月ちかき日

黄にそみし林の中にあたゝかく小鳥のこゑ
のこもれる眞晝

音たてゝわが足もとに落ちし葉に夕日のい
ろのさゝとてりはゆる

冬の樹の白く苔する幹てらしえばし明るき
陽は入りにける

冬ばれの青海^{あを}中^{なか}にかぶ帆の灰色に陽のか
げり来りぬ

川一すぢわがゆく路をかぎりたり林を出で
し冬の夕ぐれ

武藏野の雑木林を俯して見る枯草山の晴れ
しひるすぎ

際立ちて白きながれの幾すぢがわが眼の下
の枯原をゆく

眼を放てば風ぎたる冬の海青く腹すれすれ
にかもめの飛べる

郊外のあきちに山羊をつれて來し西洋人の
赤き帽かな

花すがれ蕭條とせる園内の日暮の前に驢馬
のいなゝく

温室の草のみどりに冬がれの外面の色をあ
まりさびしや

園丁の時たま道を徘徊す廣き園生のうすき
冬の陽

白頭の鳥がにはかに聲たてぬ槻の木の芽の
あかるき二階

わが凭れる園のベンチのあたり跳ぶ馴れな
れしさもにくき小兎

黒土のにほひに芽ぐむ畑草に腹すりて遊ぶ
春の小鳥ら

園丁が如雨露をかしげあゆみくる一路の畦
の春のひるすぎ

空色のうすき青さにうちかすむ花園に立ち
眼を上ぐれば

夕かせにいなゝく小舎の驢馬の音に追はる
る如く花園を出づ

驢馬のこゑ遠ざかれどもほそぼそとうしろ
に聞ゆ春の夕ぐれ

暗きかげ長き雑木の林よりふいと日向に出
でたる小犬

麥の畑なぞへに高く新建ちの平家づくりの
春のまひる日

崖下を汽車のはしれるとゞろきも春なりひ
とり郊外に住む

うすくらがり雨戸あくれば眞白なる一羽の
鷗うづくまりある

さすらひて海より遠く來しやらむしみじみ
と見る鷗のひとみ

葉牡丹の葉かげに隠れ小心のをとめの如く
羞ぢらへるかな

ふる池にはなつはやすし冬ねむる金魚をあ
はれ何とせばやな

鹽ませて盥に水をたゞふれば羽ばたきてく
る鷗のあゆみ

こゝろよく盥にひたり青空を仰げるごとき
ふりもするかな

海戀し海戀しとや啼く鷗あかつきかけて風
のふきいづ

めづらしげに近所の家の雞の鷗をめぐるあ
たゝかき晝

ひたすらに病に勝てよ、など弱きとばかり心
つよくいひしが (二首、病める田波御白を懷ふ)

おとろへていかなるさまにあるならむ思ふ
も涙さそはれにけれ

人のおもひまつはる如き春の夜のわがゐま
はりのものゝ手ざはり

音をしのび人のおもひの來しやらむこの夜
かすかに耳鳴りのする

灯のいろのものなつかしき春の夜に白きま
まなる原稿紙かな

午^{ひるさ}下れば移る陽ざしのやはらかくもの書ける手に来てたゞよへる

そことなく肉づき來り病よき横顔に春の陽をうけて居り

春の陽をまともにうけて路ゆけば帽子のうらに汗もこそすれ

ゆきあひてさげたる髪のたば櫛の蝶貝入りの春のまひる日

菜の花のはたけに猫のあそびるぬやはらかき毛に光る春の陽

うらやすく若き草生のはてに入る春の夕陽の何か惜しまる

垣のあなた阪のぼりくる荷駄馬の髪うすぐ
らくゆるゝ夕ぐれ

爛れたるくれなるのいろ黒ずめるたそがれ
空の遠きさびしさ

庭つゞきにいつもの驢馬がいなゝけりひと
寝入りしてさめし午後ひるすき

おとなしきけだものならばついて来よふみ
ごゝろよき春草の原

ものしづかに黄昏となるうす白き春の木原
を見わたしにける

驢馬がひく車のなかのをさなごの赤きマン
トに遊ぶ春の陽

陽の入りし遠野の空をながめつゝしめれる
如き若草をふむ

ひとりなりひとりなる身のうら安さ、わが前
に立つ春の靄かな

春の靄山にかゝれりしづかなる夕ぐれよとあゆ
みとめて仰げる

こゝかしこ草の間の赤土に水蒸氣たつひる
の雨ばれ

窓あけて眼をあそばするすゞしろの畑のう
へにつゞくかげろふ

鉢の花わが留守の間の卓上にうちならびる
る灯かげをおもふ

一鉢の櫻草買ひ春の夜の電車にのせてかへ
り來にけり

晴れやかに雲と雲とがゆきあへば何かうれ
しきこゝろもするかな

泣きぬれしいぢらしき子の頬の見ゆれ初秋
かせにかほを向くれば

かよわなる胸をいだきて初秋の林の風をき
くはうからむ

庭草に言葉の如くふきよれる秋風をきゝ君
をおもへる

むらさきのこまかき花に秋風のわたるみぎ
はを今かゆくらむ

秋雨ふる秋雨ふる秋雨ふるさびしくうたを
歌へるごとく

目の前の人のやすけきおもゝちをおぼえつ
つゆく秋かせのみち

蟲の音におこされて秋の夜ふかきにひとり
めざめてあるはうれしき

秋かせのわが胸にしもふき来る夜ぞとおぼ
えてねむられぬかな

秋の風遠き空よりふき来りわが倚れる樹に
しづまりにけり

ひらひらと動く障子のやぶれより秋の木の
葉のうす黄ばみ見ゆ

知らぬ兒の頬のあたりを見てあれば笑ひい
だせる電車の窓かな

誘はれてふつと笑ひぬひと時のあがなひが
たきわが心かな

われを見てはしやぎ笑へる兒が顔をあやし
くもその父は見てをり

いつしかにうとうととして目ざむれば兒が
顔はなし日暮れの電車

縁日の夜店に買ひし風車わけなく風にまは
しつゝゆく

こまやかに人をおもふは愚かなりあてなく
も見る冬の青空

人の門に山雀を飼ふ長き籠そののどかさ
反感をもつ

蔓花のからびしつるの長々と落葉樹の枝に
垂れ下がる徑

このまゝに家に歸るはさびしけれ枯葉の鳴
れる夕ぐれの路

夜の仕事ねむたくなりてやめにする時に覺
ゆるストーヴの冷え

冬の晴れ久しく見ざる人のことかにかぐ胸
に映りくるかな

久しぶりに歌の心となりしかなわがなつか
しき小春日のてる

新しき歌集をもちてわがかへる稀れの日和
の十二月かな

先づふれしわれの新書の手ざはりのこゝろ
の如く柔らかかきかな

かの丘の疎林を出づる月を見ぬしみじみと
せし心になりて

枯草の黄なる匂ひのうすけぶり遠野は靄の
ごときものたつ

陽を浴びてあたゝかげなる裸木のこゝろに
ふとも涙さそはる

そここゝの枯野の中の雨たまりぬる日にひ
たり小鳥水浴む

小春日のすゝきの枯穂ゆらゆらとわづかの
風に聴うつ眞ひる

枯すゝき中につばきの花見ゆる小山のうへ
の新建ちの家

赤きてがらかけし女の晴れやかに崖下をゆ
くわれを見てをり

午後ひるすきよりあわたゞしくも風起りしどろにな
りぬ林の黄葉もみぢ

この夜の窓より見ゆるくさむらのそよぎが
遠きものゝ如くなり

—をほり—

著者歌集目錄

◎草	◎山	◎覺	◎わ	◎伶	◎小	◎片
の	河	め	が	人	詩	わ
上	歌	た	お	國	月	れ
		る	も	明	明	月
		歌	ひ	治	治	明
				三	三	治
				十	十	三
				三	三	十
				年	年	四
				四	四	年
				月	月	一
				三	三	月
				十	十	一
				一	一	月
				月	月	
				大	大	
				正	正	
				三	三	
				年	年	
				一	一	
				月	月	

大正三年二月一日印刷
大正三年二月五日發行

(定價金四拾錢)

不許
複製

發行所

東京市牛込區矢來町中の丸
新 潮 社
電話(番町)二二二三番
振替(東京)一七四二番

著者 金子 薰 園
發行者 佐藤 義 亮
印刷者 山本 定 輔
牛込區矢來町中の丸五十八
小石川區久堅町百〇八番地

著園薰子金

■ 作歌新辭典 第三版

定價六拾錢
郵送料六錢

■ 和歌入門 第十一版

定價參拾錢
郵送料四錢

■ 作歌練習法 第三版

定價參拾錢
郵送料四錢

版藏社潮新

